

《関西サロン 2011 年 12 月例会報告》

【日 時】2011 年 12 月 20 日(火) 19:00～21:00 その後、同会場にて懇親会

【会 場】神戸レガッタアンドアスレチッククラブ(KR & AC)

【参加費】1,000 円 ※懇親会はフリードリンク 3,500 円

【テーマ】スポーツの未来 ～ ドイツの女子ワールドカップで考えたこと

【演 者】牛木素吉郎(スポーツジャーナリスト、ビバ! サッカー研究会代表)

【参加者(会員)13 名】

赤尾 修(アミティエスポーツクラブ)、浅野 立也、オスカル草葉(作家)、賀川 浩(スポーツジャーナリスト)、
テラー喜田(喜田 充/神戸 FC)、黒田 和生、高原 渉(宝塚ジュニア FC)、高藤 順、玉井 茂、
根本 いづみ(ライター)、藤田 直樹、本多 克己((株)シックス)、宮川 淑人(枚方 FC)

【参加者(未会員)19 名】

雨堤 俊祐(フリーライター)、悦勝 公豪、岡 俊彦(神戸 FC)、尾崎 龍一(神戸 FC)、
押尾 愛子((財)ユーハイム体育・スポーツ振興会)、鬼塚 学(アミティエスポーツクラブ)、
加藤 寛(神戸親和女子大学サッカー部監督)、北川 貞和(神戸 FC)、金 相煥(芦屋大学サッカー部監督)、
倉 直樹(神戸 FC)、濟木 崇(ビバ! サッカー研究会)、田口 多津(神戸高校 OG)、
出口 隆昭(なぎさフットボールクラブ)、幡野 直教(ビバ! サッカー研究会)、疋田 晴巳(R-DASH/FC 大阪)、
日向 寛峰(神戸 FC)、古部 純(宝塚ジュニア FC)、松永 正利(三菱重工)、山名 裕之(神戸 FC/ダイードリンク)

【懇親会からの参加(未会員)1 名】

渡辺 昌治(ヴィッセル神戸サポーター)

【報告書作成者】高原 渉

注1)参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

講演

地域から世界へ スポーツの未来を考える

～集中から分散へ、ドイツの女子 W 杯で考えたこと～

2011 年 12 月 20 日、神戸の KR&AC

牛木素吉郎(スポーツ・ジャーナリスト)

(講演の記録を一部修正、補筆し、一部再構成したものです)

はじめに

ぼくのサッカー殿堂入りについて関西でも祝賀会をやりましょうと、関西サロンの本多さんからお話をいただいたのですが、ぼくとしては場違いというか、見当違いというか、面映いところがあります。実は何度もお祝いされたくない(笑)。

賀川浩さんの殿堂入りのときは、関西でも関東でも、お祝いの会をおやりになったのですが、賀川さんは名選手であり、名コーチであり、名ライターであって、いろいろサッカー界への貢献は大きいのですけれど、ぼくはただの物書きですからそんなに大げさにやっていただくことはない。でも忘年会やるんだったら行くよ(笑) って本多さんに言ったら、きょうの運びになったようです。

そして、せっかく来るんだったらついでに、ということで、きょうは奈良女子大の大学院で講演をし、きょうの午前中は、加古川総合スポーツクラブの視察に行ってきました。読売新聞をやめてから、加古川市の兵庫大学に 13 年間、勤務していたので、そこで加古川総合スポーツクラブとのつながりができているのです。

そのためにですね。名刺を切らしちゃってしまってますね。先ほどから名刺を頂いくばかりで、差し上げられなくて、申し訳ありません。

きょうの 3 つのテーマ

きょうは 3 つの話をしたいと思っています。そのあとで質問にお答えしたいと思います。

1. 40 年前の改革提案

ぼくとしては、サッカー殿堂に選ばれた理由がよく分からないのです。ぼくはサッカー協会には、そんなに貢献してない。してきたのは、サッカー・マガジンとか、読売新聞とかで 40 年以上前からサッカー協会の悪口を書いていたことです。悪口を言って評価されるんだったら、もっともっと悪口を書いておけばよかった(笑)

そこで、どんな悪口を書いたのかというのが、きょうの話の一つです。

1960 年代の後半から 70 年代にかけての話です。

お渡ししてある小冊子(※配布資料『ビッグスポーツへの道』)は、そのころ、サッカー・マガジンに書いた記事の一部を復刻してまとめたものです。

実はイラストを水島さんという方が描いて下さっています。その方に連絡をとろうと、さんざん探したんですが、まったく行方が分からない。だから著作権については、いささか問題があります。ほんの少ない部数しか作っていませんので、ご容赦いただきたいと思います。もし水島さんをご存知の方がいらっしゃったら教えて下さい。牛木さんが、無断で復刻してすみませんと謝っていたと伝えて下さい(笑)。

日本のサッカーがこうなればいいという提言を、1960 年代後半に、サッカー・マガジンに書いていたんです。たとえば次の 3 つです。

- ・クラブの組織でスポーツをしよう
- ・プロとアマといっしょにやろう
- ・ワールドカップを目指そう

ところが、J リーグが始まったころに、J リーグを作ったのはオレだということで、まるで、その理念を自分が発明したか

のように、おっしゃっていた方がいました。そこで「それは違うぞ ぼくは 40 年前に書いているぞ」と(笑)。その証拠物件として復刻したのです。

これは、ぼくや賀川浩さんのような商売の非常に得なところで、書いたものが印刷物として残る。それが証拠になる。われわれの商売のいいところですね(笑)。テレビでは空中に飛んでしまって残りません。

2. ドイツ女子ワールドカップについて

2011 年の 6 月～7 月に 3 つの国際大会がありました。ドイツの女子ワールドカップと、アルゼンチンの南米選手権、メキシコのワールドユースです。そのどれかに行くか、それらすべてを東京でテレビ観戦するか、どうするかと悩んでいたのです。男子のワールドカップは 11 回連続で取材に行っているのですが、女性のワールドカップは一度も見たことがない。一度は女子のワールドカップを見ておこうというので、これにしました。ドイツのフランクフルトに 1 ヶ月アパートを借りて根拠地にして、見て回りました。全部で 15 試合を見ました。

ぼくは日本代表を追いかけたわけではありません。日本から行った他の取材者は「なでしこ」を追っかけていましたから、「なでしこ」が移動すると、ついて移動して、練習や記者会見も取材します。そのために、日本以外の試合を見る機会が少ない。私はそうではないので 15 試合も見ることができたわけです。日本の 6 試合は、もちろん、全部、見ました。

日本が優勝したのは想定外でしたが、「なでしこ」の戦いぶりには感動しました。しかし、それ以上に興味を持ったのは、ドイツの大会運営です。それについて、ぜひ、聞いていただきたいと思います。

3. 今後のスポーツについて

最後に、ドイツの女子ワールドカップを見て思ったこと、これからの日本のスポーツについて考えたことを、お話ししたい。

ドイツの女子ワールドカップは、ドイツ国内の多くは中小の都市で試合が行われました。どの町でも、町ぐるみで、市民たちが「自分たちの大会」として開催を楽しんで運営していました。

中小都市でのネットワークで大きな大会ができる。これからは、中央集中より地方分散のネットワークの時代ではないかと思いました。そのことを、お話ししたいと思います。

40 年前の改革提言

◇ローマ五輪予選の屈辱

40 年以上前に、日本サッカー協会の悪口を書いていたと申しました。

その対象は当時の日本サッカー協会の偉い人たちです。例えば、会長の野津譲(ゆずる)さん、強化の責任者だった竹腰重丸さん、事務を取り仕切っていた小野卓爾さんといった方たちです。

戦前の 1936 年ベルリン・オリンピックに役員として行った方たちで「ベルリン世代」と呼ばれていました。

そして、この人たちがずっとサッカー協会を運営していて、いつまでたっても若いものが入ってこなかった。そういうことを批判しました。でも、この 3 人がそんなに悪かったのかというと、そうではありません。非常に苦勞もされていたし、功績は非常に大きかった。ただ、功績が大きいだけに、なかなか代わらないのです。でも新しい風をいれないと世の中進歩しないと思って、いろいろ書きました。どんなことを書いたのか？ それが一つめの話です。

そういうことを東京で書いているときに「こういうふうによれ、ああいうふうによれ」って、後ろで、ぼくを操っている人たちがいました。たとえば、大谷四郎さん、岩谷俊夫さん、そして、ここにおられる賀川浩さんです。3 人はみんな、神戸一中出身で関西の新聞のサッカー担当記者でした。

たとえばですね。こういうことがありました。1960 年ローマ・オリンピックのときのことで、その 4 年後に東京でオリンピックがありますから、JOC(日本オリンピック委員会)は、それまでの少数精鋭主義を捨てて、ローマ大会には、全競技に参加させる方針でした。ところが、その当時、サッカーだけはオリンピック予選があった。その予選で負けたので全競技の中で、サッカーだけがローマ・オリンピックに参加できないことになりました。これは、日本のサッカー界にとって屈辱的なことでした。

1959 年秋のローマ・オリンピック予選に負けた日に、翌日の新聞に載せる「総評」を書こうとしていると、大阪朝日新聞の大谷さんから電話がありました。「総評を書くのなら、外国からコーチを呼べと書け」と言われました。大谷さんだけでなく、関西のほうで、そういう談合をされていてですね、操ってくるんですよ。まあ、その大先輩たちのおかげでたくさん勉強できたので、こうして悪口が書けるようになった。というか、皆さんに書かされていたわけです(笑)。

◇クラマーさんの提言とメキシコ取材

いろんなことを考えたネタもとは、デットマール・クラマーさんです。この人の話を聞いて、目からうろこが落ちるような思いがしました。

クラマーさんは、1964年の東京オリンピックのために日本代表チームを指導し、その結果として日本のサッカーは1968年のメキシコ・オリンピックで銅メダルを取ることができました。またボールの蹴り方とかヘディングの仕方とかいうような、基礎技術や戦術も変えました。それによって、日本全国のサッカーのレベルが見違えるように上がりました。

クラマーさん本人は、オリンピック・チームを強化したことが、自分の最大の功績だったとっておられるようです。

しかし、クラマーさんの残した最大の功績は、日本サッカー界の構造を変えるための提言を残したことだと、ぼくは考えています。その提言の内容を実現してほしいと、サッカー・マガジンなどを利用してキャンペーンをしたわけです。

クラマーさんの影響で、世界のサッカーの状況に目が開かれたという気がしました。それで、世界のサッカーを知るにはワールドカップを見なきゃならないと思うようになりました。それで、1970年メキシコ・ワールドカップを、相当の無理をして見に行きました。

このメキシコ大会を見て、驚いたのは、まずレベルの高さです。当時はアマチュアだけだったオリンピックとは格段に違う。技術、戦術レベルの高い、激しい試合に目をみはりました。

もうひとつ感心したのは、開催国メキシコのお祭り騒ぎです。大衆が本当ワールドカップを、自分たちのお祭りとして楽しんでいる。単に技術や戦術の話をしているだけではサッカーは分からない。みんなが楽しんでいる、大衆がやっている、それを知らないんだめだと思いました。

1970年のワールドカップの前に、1967年にもメキシコに行ったことがあります。

1968年にメキシコでオリンピックが開かれるので、読売新聞の取材の下調べと準備を兼ねて、プレ・オリンピック取材に行ったのです。

本番のオリンピック取材と違って時間余裕があったので、競技場やスポーツクラブを見て回りました。それで、外国のスポーツクラブがどんなものかということが分かりました。

たとえばメキシコ大学スタジアムが、オリンピックの主競技場になることになっていました。米国では大学に競技場があるのは珍しくありませんが、メキシコの大学スタジアムは、プロを含むスポーツクラブの本拠になっていました。また、「クルブ・イスラエリタ」というユダヤ人だけのクラブも見ることができました。いわば排他的なクラブですが、それもクラブのあり方の一つだと知りました。

そういうことに触発されて、日本のサッカーを改革するためのキャンペーンを始めたわけです。

4つの主張

そういう勉強をいろいろとしてきて、日本の学校中心、会社中心のスポーツのあり方は、良くないじゃないかなと思うようになりました。

それで、お配りしたパンフレットにあるように、4つのことを主張しました。

1. クラブのスポーツを育てよう。

学校のスポーツは、6・3・3制で区切られているので、一貫した活動ができません。中学に上がるとサッカー部がないとか、指導者が変わるとか、いろいろな弊害がある。たとえば、陸上競技で高校の短距離の選手が大学に進学する。ところが、大学で陸上を指導している人は長距離専門の人だった。よその大学にいくわけにはいかないので、結局陸上をやめてしまった。そういう例を知っています。クラブのスポーツだったら、そういうことは起きない。どこの大学に進学しても、スポーツは、自分がやりたいクラブに行ってやればいい。

会社スポーツも同じで、たとえば東京の場合、大会社のある丸の内にはグラウンドはありません。だから会社単位のスポーツでは、郊外の遠いところにある会社のグラウンドに行って練習することになります。

クラブのスポーツであれば、住んでいるところの近くのクラブに入れればいいわけです。

日本にも、クラブのスポーツを育てようと主張しました。

2. アマチュア規程反対

いまの若い人はもう「アマチュアリズム」という言葉そのものを知らないようです。きのうの奈良女子大での講演で聞いてみたら「聞いたことがない」という人もいました。

当時の日本体育協会には「アマチュア規程」というのがありました。もともとはオリンピックの理念であるアマチュアリズムを元にしたものですが、オリンピックの規程ともあり方の違うものでした。

日本体育協会のアマチュア規程は「日本体育協会に加盟しているスポーツ団体は、すべてアマチュアのみを統括しなければならない」というものでした。

一方で、FIFA(国際サッカー連盟)では「プロもアマも一つの協会で統括しなければならない」としています。

そうすると、日本サッカー協会はジレンマに陥ることになります。

日本サッカー協会は FIFA に加盟しています。FIFA の規則に従えば、日本にプロのサッカー選手が生まれたら日本サッカー協会に登録させなければならない。しかし、そうすると体協の規程に反することになります。

サッカー協会が日本体育協会を脱退すれば、日本のサッカーにプロを取り入れることはできます。手続き的には、脱会が可能です。

手続き的には可能ですけれども、そうすると、日本体育協会が主催する国民体育大会からサッカーははずされます。これは、とくに地方のスポーツにとっては、非常に大きな問題です。

日本ラグビー協会が、一度、体協を脱退したことがあります。しかし、地方のラグビーがやっていけなくなって、2 年で復帰するほかはありませんでした。

ちなみにラグビー協会が体協を脱退した理由は、体協が競輪から強化費をもらうことになったためでした。「ギャンブルから補助金をもらうのはけしからん」という主張でした。

日本のサッカーの進歩が遅れたのは「プロ化が遅かったからだ」という意見があります。

しかし、日本がプロを認めなかったのは、当時の日本サッカー協会(野津さん、竹腰さん、小野さん)が間違っていたからではありません。

日本サッカー協会の役員は、プロとアマがいっしょにやっているヨーロッパの状況は知っていましたが、日本には体協の変なアマチュア規程があったために、プロ化ができなかったのです。

ぼくは「体協のアマチュア規程は間違っている、サッカーはプロアマ共存であるべきだ」と主張しました。しかし、体協の大きな壁を崩すことは不可能でした。

なぜ、1990 年代になって、プロの Jリーグができたかという、1986 年に体協のアマチュア規程が撤廃されたからです。

なぜ撤廃されたかという、その 4 年前の 1984 年にオリンピックがアマチュアリズムを放棄したからです。日本のスポーツの主流はオリンピック至上主義です。オリンピックが変わると、日本のスポーツも、ころっと変わりました。

アマチュア規程撤廃が、ぼくのキャンペーンの影響であれば、ぼくの功績だということになりますが、残念ながら、そうではありませんでした。オリンピックのアマチュアリズムが崩壊した結果でした。

3. ワールドカップの日本開催

サッカーの世界大会を日本で開催しようという提案は、1970 年メキシコ大会に行ったあとに主張し始めました。

実は体協のアマチュア規程のために、日本のサッカーではプロを認めることができなかったため、ワールドカップ開催も、ほとんど実現できそうもないことでした(笑)。

でも新聞記者は無責任な立場だから、できそうもないことでも、言えたわけです。

これには裏話があります。

1970 年のメキシコ・ワールドカップ開催中に、メキシコシティで当時の日本サッカー協会会長だった野津さんから使いがきました。ちょっと話があるから来てくれと。それで宿泊先のマリア・イサベルという最高級のホテルに訪ねていきました。こんなお話でした。

前の日にお偉方の昼食会があって、野津会長の隣が FIFA 会長のスタンリー・ラウス(Stanley Rous)さん、その隣が米国コカコーラの会長さんでした。

その席で、ラウス会長が野津さんに「1986 年のワールドカップを日本でやらないか」と言われました。コロンビアが候補になっていたのですが、経済力や国内事情でできそうにない。代わりに経済力のある日本が立候補してくれないかと、そういう話だったそうです。6 年前の 1964 年に東京オリンピックをやっている。その実績を買われたのだらうと思います。隣席にいたコカコーラの会長さんも協力するとも言ったそうです。

野津さんは「よし、引き受けよう」と思ったのです。ただ、日本国内で反対が出るに違いない。そこで、ぼくを使っただけです。ぼくを操る人がいっぱい、いたんです(笑)。

「日本でワールドカップをやろうというキャンペーンをやってくれ」というお話でした。

それで、日本に帰ってから「サッカー・マガジン」の誌上で「ワールドカップを日本で」という連載をしました。

ところが、案の定、日本サッカー協会は反対でした。「野津さんは夢のようなことばかりいうから困る」ということでした。

当時、強化委員長だった長沼健さんは、メキシコにいたときは野津さんの前で「いい話ですね」と賛成してくれていたのですが、日本に帰ったら反対しました。

理由は3つありました。日本代表がワールドカップで戦えるほど強くない、施設がない、運営能力がない。そういうことでした。

ぼくは、いますぐという話ではない、16年先のことから、夢を持って、その間に努力してなんとかしようじゃないか、16年かけても世界のレベルに太刀打ちできないなんてことを強化委員長が言うようでは情けない、と言ったんですが、相手にされませんでした。

4年後の西ドイツ・ワールドカップのときにも同じ話が出たのですが、このときも、残念ながら動きませんでした。

このことは、そのころ出した本の中に、ちゃんと書いておきました。証拠が残っています。

ようやく日本での開催に向けた動きが始まったのは、体協のアマチュア規程が撤廃され、それに伴いJリーグが創設されてからです。

こういういきさつは、今の若い方はほとんど、ご存知ないでしょう。

4. 日本サッカー協会改革のキャンペーン

そのころの日本サッカー協会は、野津さん、竹腰さん、小野さんの、いわゆる「ベルリン世代」が動かしていました。

野津さんたちに辞めてもらって、若い世代を加えて、協会を改革しようという動きがありました。

協会の副会長の篠島秀雄さんが三菱化成の社長になっておられました。将来の経団連会長に目されていた財界のホープでした。戦前に極東大会の日本代表として活躍された名選手だった方です。

その篠島さんを担ぎ出して協会改革をしようというグループがあったのです。

そのキャンペーンに、ぼくが利用されたわけです。サッカー・マガジンに、篠島さんのインタビューを載せたりしました。非常に功績のあった先輩を批判するわけだからやりにくかったんですが、かなり露骨に動いていました。

これも、ぼくを後ろで動かしてきていた人がいたのです。いちばんの操り手は重松良典さんだったと思うています。この方は、慶応大学出身、東洋工業で日本リーグ2代目の総務主事でした。1代目の総務主事の西村章一さんも協会改革を考えておられました。西村さんは選手出身ではありませんが、古河電工サッカー部の責任者でした。

任意団体だった日本サッカー協会が、1972年に法人化されて公益法人になり、その4年後に、野津さんたちが勇退して、当時、若手と言われた長沼健さんや岡野俊一郎さんの時代になりました。

ドイツの女子ワールドカップ

◇各国チームの実力評価

先ほどお話ししたように、ことし(2011年)の6月に、外国で行われる大会について4つの選択肢がありました。その中からドイツの女子ワールドカップを選んだのは非常にラッキーでした。初めて見に行った女子ワールドカップで、思いもかけず「なでしこJapan」が優勝しました。

しかし、ちょっと、ぼくがお粗末だったのは、出かけるとき、原稿を売ることを考えなかったことですね。女子ワールドカップのレポートなんか、載せてくれるところはないだろうと思っていました。それで全部、自分の持ち出しで出掛けました。しかも、「なでしこ」が勝ち進んでいるときにも「これなら原稿売れるぞ」と思わないで、「いや～すごいもんだな！」と感心するだけで、原稿のことまで頭がまわらなかった。日本で大騒ぎになっていたことに気づいたのは帰国してからです。こんなことなら早くから原稿売り込んでおけばよかったと思ったが後の祭りでしたね(笑)。

試合はたくさん観ましたが、きょう、お話ししたいことは試合そのものではありません。

でも、少しだけ試合の話しましょう。

日本はそのときFIFAランキングで4位でした。FIFAランキングなんて、いいかげんなもので、そのときの実力を示すものでもない。しかし、現地で戦いぶりを見てみると、そのときの日本代表は完全に4位とは言えなくとも、4位に入ってもおかしくないチームでした。しかも、誰が見ても分かりますが、参加チームの中で、もっとも完成度が高かった。実力的にはドイツ、米国、その次がブラジル。ブラジルを三番目にあげることに反対する人もいますが、ぼくは面白いチームだと思いました。その次が日本とかスウェーデンとかイングランドとかですね。

そのなかで、大会に向けてきちんとチームを作ってきたのは日本がナンバーワンでした。しかし、それだけ完成度が高いということは、逆に言うと将来の伸び率があまり高くない。これ以上伸ばすには、今のやり方を続けていてもあまり伸びない。そういうことですね。

ブラジルはね。むちゃくちゃなチームでした(笑)。マルタって選手が、やみくもにうまいんですが、そのほかに、個人的にうまい選手が3人ぐらいいます。そして最初にびっくりしたのは、むかしのスーパースystemなんです。守備ラインの後ろに一人予備のディフェンダーがいてカバーしている。試合後の記者会見で「なんでスーパースystemでやって

いるんだ？」という質問がでました。それに監督が答えるわけだけれども、「我々に向いてるシステムだからだ」なんて答えしか返ってこない。次の試合のときにマルタが最優秀選手に選ばれたので、同じように記者会見があった。そこでも「なんでスーパースystemなのか？」という質問がでました。選手は正直だから「ブラジルには守るのが好きな選手がいないんです。みんな前をやりたがる。ディフェンスは誰もやりたがらないからスーパースystemを置いて守っているんだ」と答えてくれました。そんな未完成なチームだから、マルタと同じくらいのレベルの選手がディフェンスにも出てきたら、もっとよくなる可能性が大きいと思いました。

米国は、うまくて、速くて、体力的に優れているチームでした。ただ戦い方が偏っているんで、そこが変われば、あるいはツボにはまれば、もっと強くなると思います。

ドイツはチーム内に問題を抱えているようでした。地元だから勝たなくてはいけないというプレッシャーがあり、またエースの選手と監督の仲が良くなかったという噂でした。

試合についての話は、こんなところですよ。

◇中小都市で盛り上がる

ドイツの大会で、本当に感心したのはここからなんです。

女子サッカーのレベルでもないし、なでしこジャパンの活躍でもない。

それは各会場での運営の仕方に感心したのです。

お配りした資料に書いてありますが、ドイツ国内の9つの都市が会場になりました。(下の資料)

女子ワールドカップ・ドイツ2011会場

都市名	競技場			都市	
	定員	工事(年)	用途	人口(人)	特徴
アウクスブルク	22,216	新設 2009	専用	268,000	工業都市。森林地帯
ベルリン	74,244	改修 2004	陸上	3,413,000	首都。ドイツ最大の都市
ボーフム	19,226	改修 2010	専用	374,000	ルール工業地帯の中心
ドレスデン	22,933	新設 2009	専用	508,000	旧東ドイツ。ザクセン州都
フランクフルト	49,340	改修 2005	専用	662,000	EU金融中心。空路要衝
レバークーゼン	37,210	改修 2009	専用	162,000	製薬会社の町。スポーツ盛
メンヘングラッドバッハ	46,297	新設 2004	専用	265,000	工業地帯。オランダ国境近
ジンスハイム	25,641	新設 2009	専用	35,000	ネッカー地方、博物館の町
ヴォルフスブルク	25,361	新設 2002	専用	271,000	フォルクスワーゲンの町

女子ワールドカップ・ドイツ2011メディアガイドなどによる

陸上は陸上競技用トラック付き。専用は芝生フィールドのみ

スタンドは全部屋根付き。フランクフルトは全面開閉式

ベルリンでは開幕の1試合だけでした。首都ですからドイツ開催のシンボルとして1試合だけ行ったのだと思います。ベルリンは人口300万人以上で、欧州でも有数の大都市です。

しかし、大都市の会場はベルリンだけでした。

2番目に人口が多いのは、決勝戦の行われたフランクフルトで人口60万人。中都市というところです。ここは女子のサッカーがとても盛んなところです。ドイツで一番強い女子だけのクラブがあります。

3番目に人口が多いのがドレスデンで50万人ぐらいです。ここは旧東ドイツです。東側からも会場を選ぼうという配慮があったと思います。

そのほかは、人口20万～40万の中小都市です。神戸と比べたらとても小さい町ばかりです。

ちなみに、きょうの午前中に訪ねた加古川市は27万人都市です。この程度の町でワールドカップの試合をしていました。

レバークーゼンは人口16万人ちょっと。「バイエル」という製薬会社があるだけの町です。

ヴォルフスブルクは、自動車メーカーのフォルクスワーゲンの町。日本でいえば、愛知県の豊田市というところでしょうか。人口 25 万くらいですね。

いちばん小さいのはジンスハイムです。なんと人口 3 万 5 千人ぼっち。ぼくは間違いじゃないかと思いました。行くと見ると市街地は駅を中心に半径 200m でおしまい。その外側にはお店がない。そんな小さな街でも 2 万人収容の競技場があります。

そういう中小都市が会場です。しかし、試合の日には町中が燃え上がります。街の人たちは大会開催を楽しんでいます。

ファンフェストという催しがあります。町の広場に大きなスクリーンを設置して、そこでパブリックビューイングをします。

屋台なんかを置いて、競技場に行けない人たちが、そこで昼から飲んで、試合はスクリーンで見て楽しんでいる。日本のお祭りのような雰囲気です。町全体が、この女子ワールドカップは自分たちのイベントだという気持ちでやっています。

競技場に行くとき多数のボランティアが働いています。みな地元の人たちです。

必ずしもサッカーやっている人ではありません。見たところ、明らかにバスケットボールの選手だなという人もいます。いろいろなスポーツの人たちがボランティアをしてくれています。

その町では、一生のうちに 1 回か 2 回あるかないかの世界的なイベントに協力することを喜んでいました。

こういう大会では、駅から会場まで新聞記者などを運ぶメディアバスが用意されます。

駅を降りて、案内係のおじさんに「メディアバスの乗り場はどこか？」と聞きましたら「それはオレだ」といって、自分の車で連れて行ってくれました。自家用車に大会のステッカーを付けているのです。

そういうふうな運営です。本当に小さな町が、町中で盛り上がり大会を運営していました。それに感心しました。

◇輸送と宿泊

このように、ドイツの女子ワールドカップの会場は 9 都市に分散していたのですが、不便はありませんでした。

ひとつは新幹線(ICE)や鉄道(ブンデスバーン)などの交通網がしっかりしているからです。

ブンデスバーンは大会のスポンサーで、大会期間中、観戦する人たちのパスを発行していました。大会期間中、全線乗りほうだいです。2 等席ですが非常に安く開催都市を周ることができました。

ぼくは、フランクフルトにアパートを借りっぱなしにして、そこに荷物を置いて、試合ごとに鉄道で会場都市に行きました。

また、ドイツは高速道路(アウトバーン)が発達しています。遠いところでも、車で見に行く人が大部分ですね。

夜の試合では取材が終わってからだと帰りの列車に間に合わないことがあります。そういう日には、その町のホテルに泊まるのですが、小さな町だとホテルを確保するのが難しいこともあります。ぼくは幸いに、ホテルが取れなかったことはなかったのですが、近隣の別の町でホテルを取って、そこまでタクシーで行くことも難しくはありません。

車で移動する人は宿泊の心配はありません。アウトバーンで次の会場に移動する途中で、ホテルの取れる町で泊まればいいわけです。

サッカーだけの分散開催で、1 日に 1 試合を見るだけですから、移動する時間の余裕は十分あります。

◇通信とスポンサー

分散開催で不便を感じない、もう一つの理由は通信手段の発達です。

1 日に、3 つの都市で 3 試合が行われます。午後 3 時、5 時、7 時というように時間をずらしてキックオフです。見ようと思えば、全試合をテレビ中継で見ることができます。

ぼくは試合会場のメディアセンターで、他の会場の試合をテレビ中継で見て、その会場の試合を生で見ました。

先発メンバーや交代や試合後の記者会見などの情報は、インターネットを通じて知ることができます。

大会のホームページを通じて誰でも、情報にアクセスすることができます。

フランクフルトにいても、他会場の情報を、ほとんどリアルタイムで手に入れることができるわけです。

試合を各会場都市で別べつにやっても、コンピューターのネットワークで連絡を取り合って運営すれば支障はありません。それぞれの都市の実情に応じて、それぞれ特色のある運営をしながら、全体としてはネットワークでバランスをとっていく。そういう大会運営は、なかなか面白いと思いました。

大会には 3 種類のスポンサーが付いています。

FIFA がつけているのは、グローバルなスポンサー。これはソニーなどの国際的企業です。

次にドイツ国内向けのスポンサー。これはブンデスバーン(鉄道)とか、ドイツ・テレコムといったような公共企業でした。列車に乗ると、車掌さんが大会マークの形のチョコレートを配ってくる、そんなサービスもしていました。

最後に、試合の行われる会場都市のスポンサーです。これは、その町の企業などで、ほとんどは中小企業です。それぞれの町でやっているファンフェスタなどに協力していました。

こうのように、ひとつの都市に集めて開催するのではなく、地方の中小都市に分散して開催する。それをネットワークで繋ぐ。それによって、小さな町も喜んで協力し、非常に盛り上がる。交通渋滞や宿泊難の心配がほとんどない。

この運営形態に非常に感心して、これからのスポーツ大会はこの形がいいんじゃないかと思いました。

これからのスポーツ大会

◇オリンピックの弊害

ドイツ・女子ワールドカップの組織と運営を見て、改めて思ったことがあります。

それは「オリンピックの時代は、もう終わりつつある」ということです。オリンピックは弊害が大きすぎます。

オリンピックは、一つの都市で開催するのが原則です。そこに世界の 200 カ国以上の選手団が参加します。選手数は 8,000 人、役員を加えると総数は、12,000 人くらいになります。これに応援、観戦のお客さんが加わって、1 都市に集まるのですから、交通が混雑し、ホテルが足りなくなるのは当然です。

オリンピックでは、30 以上の競技(スポーツ)、400 以上の種目(イベント)が行われます。一つの都市の中心部に、40 くらいの競技場をコンパクトに集めて行います。

都心部に集中して大きなスポーツ施設を作っても、オリンピックのあとに利用するのは非常に難しい。日常のスポーツ活動は、それぞれが住んでいる地域で個別に行うものです。大都会の中心部で集まってやるものではありません。したがって、オリンピックパークのような大規模な施設を 1 カ所に集めて作っても、あとの使い勝手はよくありません。10 万人収容の陸上競技場は、大会のあとは、ほとんど活用されません。

また、オリンピックは 2 週間ちよつとの短期間に集中して行うことになっています。多くのスポーツを短期間に並行して行うのですから、施設を有効に使うことはできません。観客も短期間に集中しますから混雑します。ゆっくりと、自分の好きなスポーツを楽しむことはできません。そして 2 週間が終わったら、あとには使い勝手の悪い施設が残るだけです。

その都市で、もう 1 度オリンピックが開催されるとしても、50 年以上のちのことになるでしょう。

というわけで、多数の間を、一つの都市に集めて、短期間に集中開催するお祭りは、もう時代遅れです。

いま、東京は 2020 年のオリンピックを招致しようとしています。

しかし、東京のような混雑した大都市でオリンピックを開催するのは、弊害ばかりでメリットは、ほとんどありません。

東京都知事の石原慎太郎さんは、ぼくと同年代で、神奈川の湘南高校、一橋大学でサッカーボールを蹴ったことのある人ですが、オリンピックの弊害については、あまり認識がないようです。

ぼくは、東京オリンピック招致反対、石原慎太郎反対です(笑)。

◇ワールドカップの利点

サッカーのワールドカップは、オリンピックとは対照的な大会です。

行われるのはサッカーだけ。1 競技 1 種目だけです。男子の場合、世界各地の予選でしぼって、32 チームが出場します。選手だけなら 730 人。役員をいれても 1,000 人くらいです。オリンピックに比べると、比較にならないくらいコストは安く、運営は楽です。

お客さんは非常に多いのですが、開催は原則として 1 国単位で、会場は国内に分散しています。会期は 40 日間とオリンピックよりかなり長い。だから、交通混雑や宿泊難の心配は少ないのです。

ドイツの女子ワールドカップでは、ドイツ政府の観光局がタイアップして、各会場都市の観光案内のパンフレットを作っていました。日本語版も数種類作って、大会前に日本で配っていました。

観光客も、オリンピックのときだけに集中的に来るよりは、いろいろなスポーツに、またいろいろな時期に分散してきてもらうほうがいい。

いま、はやりのスポーツ・ツーリズムは、こうあるべきだと思います。

テレビの視聴者は、オリンピックは 40 億人、サッカーのワールドカップは 300 億人と言われていて、サッカーのほうがはるかに多いのです。オリンピックは、多くのスポーツが同時に行われますから、人気のある主要なスポーツしか見てももらえません。いろいろなスポーツの世界選手権を、時期的にも分散して行って、テレビで放映されるようにつとめたほうが、スポーツの普及に役立つと思います。

競技場は、会場になった各都市で、地元クラブの試合会場として有効に使われています。それぞれの町のスポーツ振興に大きな刺激になっています。

スポーツ大会を、ワールドカップ方式で開くことの利点は明らかです。

◇集中から分散ネットワークへ

そういうわけで、これからのスポーツは「一極集中ではなく、地方分散、ネットワークの時代だ」というのが、ぼくの考えです。

オリンピックのように、多くのスポーツを、同時期に 1 カ所に集めて開催するのではなく、それぞれのスポーツを別べつに、場所を分散して、別べつの時期に行う。それをネットワークでつないでスポーツを盛んにする方策を考えては、どうかと思います。

こういうことを、考えています。

東京にオリンピックを招致する代わりに、いろいろなスポーツの世界的な大会を日本で開催するのを援助するので

す。たとえば、春に新潟で女子バスケットボールの世界選手権をする。夏に北海道でラクロスの世界大会をする。秋に岡山で卓球の世界団体選手権をする。冬に鹿児島でラグビーのU-23の世界大会をする。

こういうふうに、競技も、時期も、場所も分散して招致します。

そのスポーツにもっとも適した季節に、適した場所で行えばいい。1年に4つのスポーツを招致すれば、10年でオリンピック1回分ぐらいの競技ができます。施設は地元にとって役立つものを整備できます。

地元の人たちが、自分たちの「お祭り」として、世界のお客さんを招いて楽しむように地域の特色を生かして運営できればいいと思います。

テレビ中継については、こういうふうに考えています。

テレビにとっては、競技会がどこで開かれてもいいのです。いまは、どこからでも世界中に中継できます。分散して行うことによって、いろいろなスポーツに放映のチャンスが生まれます。

ただし、世界選手権を招致するときに、問題が一つあります。

それは、スポーツによっては、莫大な権利金を取る国際競技連盟(IF)があることです。

たとえば2019年に日本でやるラグビーのワールドカップでは、IRB(国際ラグビー評議会)という国際団体が約130億円を日本からとって開催する権利を与えます。日本は上納金を支払って、ワールドカップを開催する権利を得ます。しかも放映権料とか、スポンサーからの広告収入はどうなっているかということ、テレビ放映権も看板広告料もIRBのものなのです。日本がとっていいのは入場収入だけです。だけど日本の試合が何試合あるかわからないし、それで満員になったところで、130億円のうちのどれだけを取り返せるでしょうか？

陸上競技やバスケットボールでも、国際連盟が厳しい条件を突きつけてきます。

ぼくの考えでは、そういう「あこぎ」な要求をするスポーツ大会を引き受けることはない。

あまり人気のないスポーツ、開催地がなくて困っているスポーツを引き受けて盛り上げて見せる。そういうふうにするれば、世界のスポーツ振興にも、おおいに寄与するのではないのでしょうか。

女子ワールドカップを日本で

◇2023年をめざして

日本のスポーツは、そろそろ「オリンピック中心主義」の衣を脱ぎ捨てて、地域のスポーツを中心にした姿に変わらなければいけない。そのために、日本のスポーツの未来を築く計画を立てて、実行しはじめてほしい。そう思っています。

そのためのモデルとして、サッカーの女子ワールドカップを日本で開催しようと運動を始めています。

女子のワールドカップの次回は2015年で、これはカナダ開催が決まっています。

その4年後は2019年で、開催地は決まっていますが、この年は日本でラグビーのワールドカップが開かれることになっています。

そこで、その4年後の2023年をめざしてはどうかと思います。

実は次回の2015年がカナダに決まる前に、日本サッカー協会の子委員会のメンバーのなかに、日本が立候補しようという動きがあったそうです。しかし、その案は、何の説明もなく、上の方で握りつぶされてしまったそうです。犬飼基昭さんが協会の会長だったころです。

なぜ、握りつぶされたかということ、犬飼さんは男子のワールドカップを、もう一度日本で開催することに執念を燃やしていたので、女子が立候補すると男子大会誘致の妨げになると考えたようです。あとになって、そういうことが分かったということです。

そういうときにですね。「男子の2度目よりも、もっと新しいことをやろうじゃないか、今度は女子をやろうや」というような

考えが出てこない。そこが、まだまだ日本サッカー協会のダメなところですね。

ぼくは、40 年以上前から、こういうふうに関心を持って日本サッカー協会の批判ばかりしていました。それで、当時のサッカーマガジンの編集長が「牛木さんの書いていることは十年一日だよ」冗談を言いました。ぼくは「そういう場合は、十年一日じゃない、首尾一貫って言うんだ(笑)」と言い返しましたけれども、四十年一日だと言われても仕方がないところはあります。

カナダの次の2019年は、ラグビーのワールドカップ開催とぶつかります。「なにも遠慮することはない。ラグビーと同じ年でもいいじゃないか」という意見もあります。

しかし、さきほど申し上げましたように、ラグビーのワールドカップ開催は、非常にお金がかかります。IRB(国際ラグビー評議会)に、100 億円以上の権利金を上納しなくてはならない。IRB は、それについて政府保証を求めています。そこで日本ラグビー協会は、toto のお金の中から約 35 億円をもらう約束を、すでに取り付けています。

サッカーの女子のワールドカップには、それほどお金はかかりませんが、やはり toto の補助金を視野に入れておいた方がいいと思います。そうすると世界的な大会を二つバッチングさせるのは慎重に考えるべきです。

また、ラグビーのワールドカップは、2 ヶ月ほどの長期にわたります。使用する競技場は、サッカーと重なるものが多いと思われる。サッカーでは J リーグやオリンピック予選などもある。「なでしこリーグ」もある。そうすると競技場の使用調整の点からも、ラグビーと女子サッカーのワールドカップを両立させるのは困難です。

そういうわけで、今から 12 年後の 2023 年をめざすのが適当だと思います。

◇分散開催のモデルとして

ドイツの女子ワールドカップを見て帰ったあと、あちこちで、こういう話をしているのですが、そうすると、2002 年の男子ワールドカップを引き受けたときと同じように、女子ワールドカップ開催を考える人がいます。

たとえば新潟のサッカー協会でこの話をしたときに、「新潟にはビックスワン(4 万人収容)があるからぜひここで女子ワールドカップも引き受けよう」という話になりました。

ぼくは「そういう考えでは、ダメなんだ」と反論しました。

県内の中小都市、たとえば長岡あたりに 2 万人収容の陸上競技のトラックのない球技専用競技場をつくる。そこで女子ワールドカップを引き受けて、それを機会に長岡にフットボールクラブを育て、そのクラブのために球技場が、将来にわたって役にも立つようにする。そういう地域に役立つ将来構想のもとに大会を引き受けよう。そう主張しました。

今回のドイツ女子ワールドカップでは、ベルリン以外はすべてサッカー専用競技場でした。

40 万人都市に 2 万人ぐらいのサッカースタジアムがある。そこで試合をするフットボールクラブがある。これは日本でも、決して奇想天外な話ではない。40 年前にワールドカップを日本でやろうっていう話は奇想天外でしたが、いまはそうではないと思う。2 万人ぐらいで陸上トラックがないスタジアムというのは非常に見やすくして良い。ぜひこういうふうになって欲しいと思います。

兵庫県でやるにしても、神戸は大きすぎる。加古川あたりでも、出来るのではないかな。そういうふうを考えています。

男子のワールドカップも、地方分散開催ですけれども、女子と違って非常に多くの観衆を集めますから、あまり小さな町ではできません。しかし、女子なら小さな町でもできる。ドイツの大会では、どの会場も満員だったけど、それほど高い入場料はとっていません。

一方、開催に必要な経費も、それほど大きくない。

だから、地方分散開催に、非常に適していると思います。

そういう分散開催による地域スポーツ振興のモデルをめざして、2023 年の女子ワールドカップを、日本国内の中小都市のネットワークで開催したいと願っています。

◇オリンピック招致反対

そういう地方分散とネットワークによるスポーツ振興をめざそうというのが、ぼくの考えです。

ですから、中央集中型のオリンピックを、日本でやることはない。オリンピックをまだやっていない国、やりたいと思っている国があれば、その国にやってもらえばいい。日本がそれを横取りすることはない。

ことし(2011 年)の 8 月に、東京の産経新聞から取材を受けました。あるテーマについて賛成と反対の両方の意見を掲載する「金曜討論」という欄があるんですが、そこで「東京のオリンピック招致」をテーマに取り上げました。賛成論は青山侑(やすし)さんという明治大学の先生で元東京都副知事です。反対論がぼくです。

なんで、反対論をぼくに述べさせるのか、もっと有名な人がいるだろうと訊いたら、大学の先生でブログなどで反対論を主張している人を訪ねて頼んだんだけど、新聞に載るとなったら皆さん取材を断ったそうです。5 人くらい断られて、仕方なく(笑)、ぼくのところにきた、ということでした。

賛成論が大学の先生だから、反対論も大学の先生の方がよかったですでしょうけど、またぼくは読売新聞出身ですから、産経新聞としては使いたくなかったのでしょうか(笑)。でも、ほかに引き受け手がいないんだからしょうがない。といういきさつで、ぼくの意見が掲載されました。

ぼくの反対論の方が、青山先生の賛成論よりも、よっぽど説得力があると、自分では思ったんですが、まったく反響がありませんでした。産経新聞出身の賀川浩さんが、ここにおられるので言いにくいのですが、産経新聞はあまり影響力がないようです(笑)。

(賀川浩:それは 東京の産経やからや=笑)

えっ? 大阪産経新聞は違うんですか?(笑)。

そういうわけで、これからはオリンピックでなくて、いろいろなスポーツの世界選手権を日本でやる方向で力を注いだらいい。別にサッカーでなくとも、バスケットボールでも、なんでもいいですよ。

国際大会を招致するのなら、そういうふうにしたらいいと考えています。

◇日本スポーツの構造改革

国民体育大会もオリンピックと同じですね。多くの競技を1カ所に集めて、短期間にやる。これを解体して、年間を通しての各地分散開催に組織し直してはどうでしょうか?

日本体育協会は、ことし(2011年)が、創立100年で、それを記念して[スポーツ宣言日本]というものを発表したけれど、具体的なプランはなにも示されていません。国民体育大会の改革も検討はされていますが、手直し程度で、変わり映えないようです。

新しい発想でものを考えないといけないのに、これまでと同じような考え方で、時代の移り変わりに応じて日本のスポーツをどうすればいいのかという考えはありません。これではダメですね。

そういう点ではサッカーは新しいことをしています。

それで、ぼくは分散ネットワークの大会をすることによって、地域中心のスポーツ振興を図るべきだと主張しているのです。そのモデルとして日本で女子のワールドカップをやろうと思っているわけです。

日本サッカー協会会長の小倉純二さんに、この話をしたら賛成してくれました。

12年後(2023年)にやろう。8年後の2019年は、ラグビーのワールドカップと重なるから、ここは譲って、ラグビーの応援をしよう。ラグビーの会長さんは森喜朗さんで元総理大臣です。政治力、腕力があります。

森さんに「2019年はラグビーを応援するから」と恩を売っておいて、2023年に協力してもらえばいい。

12年後に、ぼくが生きているかどうかは怪しいのですが、ぼくが生きているかどうかは問題ではありません。日本のスポーツが死ぬか、生きるかが問題です。

そういうわけで、今日のぼくの主張は、中央集中から地方分散のネットワークへと、日本のスポーツの構造改革をしようということです。

そういう動きは、すでにはじまっています。

きょうの午前中に見に行ってきた加古川のスポーツクラブも面白いところでした。

総合型スポーツクラブと名前が付いていますが、実は総合型ではなく分散型なんです。

加古川自体が地方ですけれど、その中で分散ネットワーク型にスポーツクラブを組織しています。

市内に12の中学校があります。ひとつの中学校区ごとにスポーツクラブを組織しています。「中学校」ではありません。「中学校区」です。学校ではなく地域です。

1つの中学校区に3~4つの小学校がある。それぞれの小学校の体育館や校庭を開放して、町の人びとが、いろいろなスポーツをしています。

その全体のネットワークが「総合スポーツクラブ」です。

6,000円の年会費を払えば、どこの中学校区の施設の活動にも参加できる。卓球なんかは人気があって、年配の初心者もたくさんいる。そこで、この小学校では初級者レベル、ここでは上級者レベルと、競技レベルが選べるんです。それで、ときどきクラブ間で試合をする。非常に興味深い試みです。これもひとつのネットワークです。

上に誰か偉い人がいてまとめているのではない。いくつかの小さなスポーツクラブをネットワークで繋いで、それでひとつの加古川スポーツクラブとなっている。これも分散型じゃないかな。

質問と答え

司会:それでは、参加の方がたの、ご質問を受けたいと思います。

◇サッカーのために尽力した理由

質問(鬼塚学):牛木さんは「いろいろと操られてきた」とお話をされていましたが、操られていたら、いやいやの立ち場になると思います。そうではなく、協会批判など、首尾一貫してやってこられた情熱、原動力はなんでしょうか？

牛木:ぼくが新聞記者になったのは1956年ですが、そのころ、第3回アジア競技大会を東京で開催することが決まっています、その準備委員会が始まっています。会議は報道陣に公開して行われていて、それを取材していました。

この大会は戦後始めて日本が開く大きなスポーツ大会です。まだまだ日本もアジアも苦しい、貧しい時代でしたから、あんまり数多くの種目をするのではなく、競技数を減らそうという議論をやっていました。そしてサッカーは人数が多いからやめようという話になりかけた。途中、会議が休憩になり、雑談をしていたんですが、そのときに、東京の産経新聞のある記者が「サッカーなんてやることないよなあ。あんなの世界で、あまりやってないスポーツだよなあ」と言い出しました。

ぼくは、駆け出しの新米記者だったのですが、それを聞いてびっくりしました。

その記者は、早稲田のボート部出身の方でした。スポーツ出身の現役の中堅記者ですら、サッカーについて、その程度の認識しかない。これは、サッカーの出身者として、このスポーツを知ってもらうために何かやらなくちゃいけないと思いました。これが、サッカーのために一所懸命になりはじめた最初の理由です。

二番目の理由は、西ドイツから来たコーチのクラマーさんの影響です。

クラマーさんは東京オリンピックに備える日本代表チームを強化するために、1960年から日本のサッカーを指導しました。クラマーさんは新聞記者を大事にしてくれる人で、ぼくたちと話をする機会を、よく作ってくれました。

日本に来られて2年目のときかな。

新潟で行われた実業団選手権のときに、試合を見ながら、こういうことを言いました。

日本ではトップレベルの選手が、大学チームと会社(実業団)チームに分かれて別べつにやっている。お互いに対戦することは、ほとんどない。これはよくないことだ。強いチーム同士が集まって、お互いに競い合ってやって、さらにレベルをあげることができる。大学と会社(実業団)が、いっしょにリーグを組むべきだ。

これがクラマーさんの意見でした。

ぼくが「日本の大学サッカーには古い伝統があって、そのリーグを解体するのは難しい」などと反論したら「日本のサッカーの伝統よりドイツのサッカーの方がずっと長い。そのドイツですら、地域リーグを組み直して、ブンデスリーガ(全国リーグ)を作ろうとしている。日本で大学と実業団がいっしょにやることが難しいとは思えない」。

そんなやりとりを、本部席の近くで大きな声で英語でやっていたものだから、周りこいた新潟県協会人たちは、牛木とクラマーさんは喧嘩していると思ったらしい。

そう勘違いされるぐらい熱心に説かれて、ぼくたちは目からうろこが落ちるような思いを何度もしました。いと違って外国の情報がほとんどなかった。だからそういう考え方はほんとに新鮮なものでした。

◇読売クラブの創設

たとえば、いまのヴェルディの前身である「読売サッカークラブ」を作ったのも、クラマーさんの影響です。

会社や学校のチームではなく、欧州にあるようなクラブ組織にしようと計画しました。

読売サッカークラブは、読売新聞社のチームではありません。読売の社員のチームじゃない。だれでも入れるクラブとして創設しました。こんなことは当時はなかなか理解してもらえないことでした。

当時の日本サッカー協会会長の野津謙(ゆずる)さんを、読売の社主だった正力松太郎さんのところに連れて行って、正力さんにサッカークラブを作ることを頼んでもらいました。

正力さんは野津さんに「サッカークラブを作るのに何が必要ですか」と鋭い質問をしました。それに対する野津さんの回答も鋭くて「まずサッカー場が必要です」。続けて正力さんが「どれくらいのサッカー場が必要か」と質問をしました。

野津さんは、たまたまイングランドのフットボール協会(FA)の100周年記念の写真集を持っていました。その表紙の見返しに、ロンドン郊外の111面のサッカーグラウンドの空中写真に載っているんです。「英国には、こういう場所もあります」と野津さんが説明しました。

そこで、正力さんが、よみうりランド社長の関根さんに「よみうりランドにサッカー場を120面作れ」と指示しました。関根さんは、正力さんの娘婿です。

もちろん、地価が高い東京郊外に、120面のグラウンドを作るのは無理です。だけど、当時、読売グループでは、正力さんに言われたら絶対に、何とかしなくちゃならない。その野津-正力会談は11月末か12月初めだったんですが、その1ヵ月後の1969年1月3日付の読売新聞の一面に「よみうりランドにサッカー場を作る」という社告を載せました。

広大な土地を提供してもらって、4面のフィールドのある「よみうりサッカー場」をその年の秋には完成させました。そし

て会員を募集したんです。

でも、当時はみんな学校か会社でスポーツをやっていますから、はじめは、トップレベルの会社や学校チームには入れてもらえないのが来るんです。でも、そのなかから、のちに日本代表になる選手も育ちました。第一号は小見幸隆ですね。小見はいま、柏レイソルのフロントをしています。柏は、ことし(2011年)J2から復帰してたちまちJ1で優勝したね。その功労者であるネルシーニョ監督を呼んできたのが小見です。小見は読売クラブに来たとき、都立高校の生徒でした。その高校のサッカー部は弱かったけれど、小見は飛びぬけてうまかった。それで、読売クラブでどんどん伸びました。クラブの良さが生きた選手の第1号です。

クラマーさんが、クラブが必要だと言ったから、それに影響を受けて、読売クラブを作ることを裏で画策しました。クラマーさんに操られながら、読売を操ったわけです。

◇わくわくしていること

質問(鬼塚学):いま、ときどきわくわくしていることは何ですか

牛木:いや、ぼくはあまり興奮しないんです(笑)。試合を観ていて、日本代表が勝ったりしても僕は冷静です。ぼくたちの仲間の犬住良之というライターは、よく興奮してます。南アフリカでも、日本が点を入れると記者席で飛び上がって叫んでいました。

ぼくはあまり「わくわく」しない。さっき言った女子ワールドカップを日本でやりたいというのも「なでしこ Japan」の活躍に感激したからではありません。この機会を、うまく生かして、女子ワールドカップの日本開催を実現させ、それによって日本のスポーツの体質を変えたい。そんなことは、ぼく一人ではできないから、今度は人形遣いになって誰かを動かしてやろう(笑)と思っている。「わくわく」というより、そういう陰謀を企んでいます。

◇学校とクラブ

質問(加藤寛):いま、サッカー界はずいぶんクラブスポーツへの理解が進んでいますが、日本の他のスポーツにはクラブの制度が浸透していると思えません。文部科学省は、総合型スポーツクラブを作ろうと言っていますが、実際には町のスポーツクラブではまだまだ発展していないと思っています。それは、中体連とか高体連とかの、競技会を整備しているだけの学校スポーツが大きく影響しているからだと思っていますがいかがでしょうか?

牛木:まったく同じ意見です。きょう加古川スポーツクラブに行って、悩みやら意見やらを聞いてきましたが、中学生年代の扱いが、その悩みの一つだということでした。子どもたちが小学生のときに町のクラブでスポーツをやっているけど、中学生になるとクラブでは出場できる大会がない。中学校の部活動に入れば中体連の大会がありますが、クラブでやっている子どもは出られません。

それなら、中学校の部活に入ればいいじゃないか、ということになりますが、これには二つの問題があります。

一つは、子ども自身が小学生のときからやっているクラブでやりたい。学校ではやりたくない。

もう一つは、種目によっては、中学校に入りたい部活動がない。子どもの人数が減っているのも、ひとつの中学校でできるスポーツが限られています。

東京では複数の学校が共同して、こっちはバレーボール、こっちはラグビーという形で、連合チームで中体連の大会に出ているケースもあります。人数が足りないからです。出場はひとつの学校名で、でも構成員3つぐらいの学校から集まっている。それだったら町のクラブと同じです。はじめから、地域のクラブにすればいい。

中ぐらい以上のレベルの競争的なスポーツでは、学校スポーツは大きな障害になってきています。

学校スポーツが、これまで日本のスポーツ普及に大きな役割を果たしてきたことは十分に理解しています。でも、このままでは学校スポーツはダメです。

東京では筑波大附属高校の中塚義実先生が中心になって、DUOリーグというのをやってきています。学校もクラブもいっしょになってリーグをやろうという試みです。中塚先生はサロン2002の理事長です。

本質的に言えば、学校の体育は授業の一環としてやる。そして、課外のスポーツは教育活動の一環という考えから切り離す。学校施設を使ってもいいんだけど、学校から離れて地域のクラブでやる。そういうのが本来の在り方だろうと思います。必ずしも学校の先生が面倒を見る必要はない。加古川は学校の先生でない民間の指導者が、たくさん指導しています。

指導者資格制度は必要だとは思いますが、資格を持っていればいいという問題ではありません。小学校区などの小さな地域でやっていたら、「あのおじさんはダメだよ」とか「あの方は子どもの扱いがうまい」とかの情報が筒抜けになってきます。だから資格があっても、ダメな指導者は排除されます。

学校スポーツを、これからどうしたらいいのかは、難しい問題です。中体連、高体連を解散しますか?(笑)

中体連、高体連は学校の校長先生の集まりです。だから、中体連は本来、中学校の教育のための組織です。でも現場

の先生は一生懸命に部活の選手権をめざしています。

また、高体連は高校の校長先生による組織で、そのなかに陸上部会とか柔道部会とかがあります。多くの部会の委員長は校長先生です。サッカー部会の委員長は、どういうわけか、伝統的に実際のサッカーを指導している先生です。

こういう組織がいいかどうか、中体連、高体連が何をすればいいのかは、中学校や高等学校のほうで考えてもらわなければなりません。

加藤さんのほうでこうやったらいいよという提案はありますか？

加藤寛: 他の競技団体も、サッカー協会のように年齢別の登録をして、その登録に基づいて各競技会を平等に取り扱うべきだと思います。

牛木: サッカー以外のスポーツでは、年齢別の登録ではないのですか？

加藤寛: 詳しく調べていませんが、違うと思います

牛木: それは調べる価値がありそうですね。サッカーでも昔の登録制度は、第1種が「社会人をもって構成されたチーム」、第2種が「単一の大学の学生をもって構成されたチーム」、第3種が「単一の高等学校の生徒をもって構成されたチーム」というようになっていました。つまり、身分別というか、学校単位のチーム登録でした。

この学校別、身分別の登録を年齢別に変えようという提案が、神戸のほうから出て、1970年代に現在のような、18歳未満、15歳未満というような年齢別になったわけです。

これにもとづいて、日本サッカー協会の主催する選手権は年齢別であるべきだ、というのが建前です。中体連や高体連の大会は、特別な身分のものだけを集めた特殊な大会であるにすぎない。それが大きな力を持っていてもいいのか？ そういう問題だろうと思います。

◇当時の協会関係者の反応

質問: 40年前からの批判記事に関してですが、掲載したときのサッカー関係者の反応を教えてください。

牛木: ワールドカップの日本開催については、長沼健さんをはじめ、当時の若手もみんな反対でした。「やろう」と言っていたのは野津会長だけ。当時の日本のサッカー界の状況では、開催能力がないと考えるのが常識的だったでしょうね。

クラブ組織でやろうということについては、サッカー協会の偉いさんたちも反対はしない。サッカーの関係者はヨーロッパの状況を知っているので、同じようになればいいやなあと思っている。でも積極的には進められない。現実には困難でした。日本では、学校スポーツが盛んだったので、それを壊したら日本のスポーツはなくなっちゃう恐れもあった。サッカー関係者はクラブがいいことは分かっていたんですが、どうしたらいいかは分からなかったのだろうと思います。

問題は、先ほどお話しした通り日本体育協会のアマチュア規程があったことです。

サッカー協会の人、おおっぴらには、欧州のようなプロを含むクラブを作れとは言えなかった。当時のサッカー協会の偉い人たちが無知だからクラブを推進しなかったわけではなく、政治的にクラブ制度を進めることができなかったという事情もあります。

1960年のローマ・オリンピックに、協会から松丸貞一さんが視察に派遣されました。松丸さんは慶応のOBで、協会の常務理事でした。帰国後にサッカー協会の機関誌に報告を掲載したんですが、その中で「イタリアでサッカーが盛んなのはクラブという制度があるからだ」と書いています。そこまではいいのですが、その先が良くない。「しかしクラブという制度は日本では到底できない」と書いた。

その当時、協会機関誌の編集を手伝っていた中条一雄さんが、それを読んで怒りました。それで機関誌のトップページの意見を書く欄で「はじめから、日本ではできっこない、というような考えは情けない」と、松丸さんのローマ・オリンピック視察報告を批判しました。

協会の機関誌の1ページ目にですよ。協会のお偉方の報告への批判を掲載したのです。

その号が印刷所から協会の事務所に届いたとき、それを手に取った小野卓爾さんは、びっくりしました。

そのころ、小野さんは協会を一人で取り仕切っている実力者でした、

小野さんは、1ページ目を差し替えるように命じました。ぼくは中条さんとともに編集を手伝っていたのですが、「これは中条さんのやり過ぎだ」と思って、中条さんに無断で、そのページを差し替えて製本し直しました。

ですから同じ号で巻頭記事が違うものが出来た。同じ号が2種類あるのです。両方を持っている人がいるかもしれない(笑)。持っていれば貴重です(笑)。

協会のお偉方も、クラブのスポーツがいいことは分かっているんだけど、ひとつは政治的に言えない、もうひとつは弱気ですね、日本では無理だという思いこみです。

ぼくたち新聞記者のような立場では「クラブでスポーツをやるべきだ」と言えるけど、実際に実行する立場では無責任なこととは言えないわけです。

◇アマチュアリズムの問題

賀川浩: だからね。要するに、協会の立場ではできないんですよ。だから神戸は自分たちで勝手に神戸フットボールクラブを作った。地方だから自分で作れるんです。さっきから言われているよう、にスポーツは地方からがいいんです。政治も地方から。(笑)

それが当たり前で、だいたいこんな広い国を、中央が全部牛耳ってやろうというのがそもそも間違いなんです。サッカーでも同じで、その土地のものは自分たちのやりたいようにやって、そこから出てくるのが本筋なんですけどね。ところがそれは「言うは易く行は難しい」。

特に我々の世代には「オリンピックは絶対にいいものだ」というバカげた考えがあって、それが「アマチュアじゃないとあかん」という考えになる。

でも、牛木さんが言うておられるように、いまでは、若い人たちはオリンピックはアマチュアだったということを知らない。プロで出るのが当たり前だと思っている。昔はそうではなかった。ウィンブルドンをきっかけとして、テニスがプロの参加を認めたのが、日本で考え方が変わるきっかけになりましたね。

サッカーは、もともと違う考え方だった。プロもアマも規制されなくて出場できるというワールドカップを FIFA は開催していた。1970年代までは、オリンピックはアマチュアだけのものだから、プロを認めるサッカーは、オリンピックから追い出せという考えがあったわけです。でもこんな話は、いまでは忘れられていて若い人は知らない。だから、昔のことを説明しても分からないでしょう。

牛木: そう。みんな知らない。アマチュアリズムの話とかアマチュア規程の話とかは若い人には理解してもらえない。オリンピックはアマチュアリズムだったことは、もう忘れられている。

当時の日本体育協会の規程は、オリンピックよりも、もっとひどかった。

オリンピックのアマチュア規程は、オリンピックに出場する者はアマチュアでなくてはならない、というもので、すべてのスポーツ選手がアマチュアでなければならないというものではなかった。

ところが日本体育協会のアマチュア規程は、日本体育協会に加盟している競技団体は、すべてアマチュアだけで構成されていなければならないでなくてはならない、というものだった。

当時のオリンピックのアマチュア規程は、オリンピックに参加する選手の資格だけを規制するものだったんですが、日本の体協の規程は違って、日本の競技団体はすべてアマチュアでなくてはならないという無茶苦茶なものだったんです。それが当然のように、まかり通っていました。

アマチュアリズムは世界を覆うスポーツの共通の理念だと、日本では信じられていた。というか、そういうように教え込んでいた。

実際には、世界のスポーツ界は、まったく違うのに……。当時から、サッカーだけでなく、卓球とか自転車とかでは、国際的にプロもアマチュアも同じ組織のなかでやっていました。でも日本は、プロとアマを厳重に分けなければならなかった。だから、競輪選手会とアマチュア自転車連盟とで、形だけの委員会を作って、それで国際自転車連盟に加盟して世界選手権大会に出るような苦し紛れなこともやっていた。

日本のスポーツをダメにしたのは、ここだけの話……。当時、陸上競技のアマチュアリズムを、すべてのスポーツに押し付けていた、特定の人物ですよ。この人が犯人だ。え〜と、名前は書かないで下さい(笑)。

司会: 書けない話もでてきたところで、打ち切りたいと思います。続きは懇親会ということで講演会を終了させていただきます。ありがとうございました。